



宇部100(飛躍)法人

宇部市制施行100周年記念市民プロジェクト

発行 NPO法人うべ未来100プロジェクト

宇部100(飛躍)法人

宇部市制施行100周年記念市民プロジェクト

発行 NPO法人うべ未来100プロジェクト

発刊のごあいさつ

宇部市は大正10年(1921年)に、村から一躍「市」となりました。令和3年(2021年)11月1日宇部市制施行100周年を迎えます。

当NPO法人うべ未来100プロジェクトでは、より一層宇部のまちを発展させるべく宇部市制施行100周年までに100のプロジェクトを目指し立ち上げました。これまで「宇部歴史読本」出版を始め、「宇部歴史検定」、「海拔表示」、「こども科学 in ときわ」の実施、「ときわファンタジア・イルミネーション/ときわファンタジア・イルミネーションコンテスト」、「宇部ブランド芋焼酎・長州」の文等々、発足以来目標にしておりました100以上のプロジェクトを達成することが出来ました。

さて、この度、当100プロジェクトでは集大成として、宇部市主催「宇部市制施行100周年記念市民プロジェクト」に参加し、宇部市と共同で『宇部100(飛躍)法人』記念誌の出版を企画担当いたしました。

宇部市が誕生した大正10年の翌年に当時の産業地図とも言うべき企業や商店などを記した宇部市の地図が作成されており、今日に於いては往時の活力を彷彿させる貴重な産業遺産になっています。中には、当時の店舗名が今でも続く老舗が存続していることは極めて重要なことであり改めて新鮮な驚きを感じます。

最後に、この冊子の発刊にあたり全面的にご支援・ご協力いただきました宇部市をはじめ、各企業・団体の皆さま及び実行委員の方々に心より深く感謝申し上げます。

NPO法人 うべ未来100 プロジェクト理事長
光 井 一 彦



宇部市・まちの歴史 (大正～昭和)

1921年 (大正10年) 11月1日 宇部市誕生

厚狭郡宇部村が村制から町制を経ずに市制施行



1924年 (大正13年) 渡邊祐策が常盤池畔7000坪を
購入し市に寄贈(常盤公園の基礎となる)

1925年 (大正14年) 常盤公園開設

3月26日 - 宇部鉄道 (現・JR宇部線)
宇部-小郡間全通



1928年 (昭和3年) 宇部市で最初の花火大会を開催

1929年 (昭和4年) 宇部電気鉄道 (現・JR小野田線)
宇部-小野田間開通



1933年 (昭和8年) 宇部港完成

1934年 (昭和9年) 炭都祭開催

1935年 (昭和10年) 第1回石炭祭(「宇部まつり」の原型)

1937年 (昭和12年) 4月 - 渡辺翁記念会館竣工



1941年 (昭和16年) 恩田運動公園完成

1942年 (昭和17年) 周防灘台風が宇部市に上陸
厚東川が決壊して約84,000人が罹災
沖ノ山炭鉱、宇部窒素工業、宇部セメント製造、
宇部鉄工所が合併して宇部興産株式会社が設立

1943年 (昭和18年) 宇部鉄道が国鉄に買収される

1944年 (昭和19年) 宇部銀行が百十銀行等と合併し、山口銀行宇部支店になる

1945年 (昭和20年) 宇部大空襲

1950年 (昭和25年) 厚東川ダム完成。

1951年 (昭和26年) 常盤通りに50メートル道路完成

1952年 (昭和27年) 石炭祭を19年ぶりに復活



宇部市・まちの歴史 (大正～昭和)

1955年（昭和30年）船木町 万倉村 吉部村が合併して
楠町誕生

「花いっぱい運動」始まる
宮大路動物園開園



1958年（昭和33年）常盤公園に遊園地ができる
第1回花壇コンクール開催



1959年（昭和34年）俵田翁記念体育館落成

1961年（昭和36年）常盤公園で第1回野外彫刻展
(UBEビエンナーレの前身) を開催



1963年（昭和38年）第18回国民体育大会夏季大会
(山口国体) が開催される

1966年（昭和41年）7月1日 - 宇部空港(現山口宇部空港)
開港



1967年（昭和42年）宇部興産(株)宇部鉱業所が閉山
石炭の採掘が終わる

1969年（昭和44年）石炭記念館開館

1972年（昭和47年）市花をサルビア 市木をクスノキに制定

1975年（昭和50年）宇部市環境保全センター完成
山口宇部有料道路開通



1976年（昭和51年）「赤間硯」が国の伝統的工芸品
に指定

1979年（昭和54年）宇部市文化会館完成
丸山ダム・今富ダム完成

1980年（昭和55年）11月21日 - ニューカッスル市と
姉妹都市締結

1983年（昭和58年）宗隣寺の庭園が国の名勝に指定

1985年（昭和60年）国内初の人工ふ化によりモイロ
ペリカンのカッタ君が誕生



宇部市・まちの歴史 (平成～令和)

1991年（平成3年）ときわ湖水ホール開館、
宇部市立図書館新築オープン

1992年（平成4年）5月18日 - 中国 威海市と友好都市締結



1995年（平成7年）宇部市リサイクルプラザ完成
常盤公園に熱帯植物館が開館
アニメ映画「カッタ君物語」公開



1997年（平成9年）6月5日 - 国際連合環境計画(UNEP)から
「グローバル500賞」を受賞

1998年（平成10年）男女共同参画宣言都市となる



2001年（平成13年）山口きらら博に単独パビリオン
「未来フロンティア宇部市館」を出展

2004年（平成16年）11月1日 - 厚狭郡楠町と合併
市花にツツジを追加



2005年（平成17年）渡辺翁記念会館が
国の重要文化財に指定

2007年（平成19年）緑と花と彫刻の博物館
(ときわミュージアム)が開館

宇部炭鉱関連遺産（沖ノ山電車竪坑
石垣、常盤用水・常盤工業用水の放
水・受水関連施設、旧宇部銀行本店、
石炭記念館所蔵炭鉱資料、宇部市渡
辺翁記念会館、沖ノ山用水の旧桃山
一号配水池監視廊入り口と桃山配水
計量室）に指定される



2008年（平成20年）常盤公園が登録記念物に登録される
アクトビレッジおのオープン

2009年（平成21年）8月5日 - 楠こもれびの郷開業
真締川ダム完成

2010年（平成22年）ヒストリア宇部
(旧宇部銀行館)オープン



宇部市・まちの歴史 (平成～令和)

2011年（平成23年）第66回国民体育大会
「おいでませ！山口国体」開催
第11回全国障害者スポーツ大会
「おいでませ！山口大会」開催



2013年（平成25年）宇部湾岸道路 藤曲IC-東須恵IC間開通



2015年（平成27年）「UBEビエンナーレ×
まちじゅうアートフェスタ」を初開催

2016年（平成28年）3月19日ときわ動物園グランドオープン



2017年（平成29年）4月29日ときわミュージアム
「世界を旅する植物館」がリニューアルオープン

2018年（平成30年）SDGs 未来都市に選定
「うべ産業共創イノベーションセンター 志
（うべスタートアップ）」開設



2019年（平成31年）ノーベル生理学・医学賞受賞の
本庶佑教授に本市初の市民栄誉賞を授与



4月4日 - スペイン カステジョ・デ・ラ・
プレーナ市と姉妹都市締結

(令和元年) 新庁舎立体駐車場 完成

7月20日 - 常盤町1丁目スマイル
マーケット(ときスマ)オープン



うべ未来エネルギー株式会社設立

※2021年（令和3年）市制施行100周年



宇部市のあゆみ ～石炭産業の発展を中心に～

■宇部炭田のはじまり

宇部地域における石炭の発見について、それを明確に示す史料は現在のところ見つかっていないが、1645年（正保2年）に松江重頼によって編纂された俳諧論書『毛吹草』^{けふきぐさ}のなかで長門国の名物として舟木（現在の宇部市船木）の石炭が紹介されていること、また、1698年（元禄11年）、常盤原^{ときわばら}の地に築造された常盤池^{（註1）}の底から後年、石炭採掘の跡が発見された^{（註2）}ことから、少なくとも江戸時代前期には常盤原の集落では、すでに石炭の採掘が行われていたと考えられている。

宇部炭田の石炭は、今から4～6千万年前の新生代古第三紀の始新世の時代のもので、山口市阿知須付近から山陽小野田市の厚狭川河口あたりにかけて分布しており、主な炭層は下から順に三尺層^{ふただん}、二段（袴腰）層^{いつだん}、五段（七甲）層^{ふたいし}、大派層^{ひといし}、二重石層、一重石層の6層ある。また、炭層の傾斜は3～5度と緩やかで、その上を砂や粘土などで形成された第四紀層（約260



炭生跡の傍にある「宇部炭田発祥の地」の石碑
（2020年7月建立）

万年前から現在までの地層）が20～120mほどの厚さで覆っている^{（註3）}。宇部地域はその第四紀層の下にある炭層を採掘するため、そのほとんどが坑道を垂直に掘り下げていく竪坑で^{（註4）}、これら採炭竪坑のことを「炭生^{たぶ}」と呼んでいた。常盤湖周辺では現在でも、江戸期の炭生跡を見ることができ、「山炭生^{やまたぶ}」や「炭生野^{たぶの}」といった石炭に因んだ地名などもいくつか残されている。

■石炭焚きの製塩法の普及

石炭の当初の利用方法はいわゆる薪の代用であったが、1762年（宝暦2年）に床波浦浜中の塩浜で石炭が燃料として使われ始めると、常盤池周辺の採炭が急増した。続いて、1778年（安永7年）には、三田尻（現在の山口県防府市）の塩田でも、燃料として石炭が普及するようになった。製塩は塩分濃度の濃い海水を塩田でつくり、それを煮詰めることで生産される。元々、その燃料に薪が使われていたが、大規模な塩田の開発によって、塩の生産が増えるとともに森林の伐採が進んだことで薪の価格が高騰、その代用として目を付けたのが石炭であった。

これを機に石炭焚きの製塩法が、瀬戸内海沿岸部の十州塩田^{（註5）}へと広がっていき、農閑期の副業として採掘を行なうものまで現れた。やがて、その収入に目を付けた長州藩は、石炭の積荷場であった有帆川の河口付近に船改所^{ふなあらためしよ}を設け、運上金（税）を取り立てはじめる。また、天保年間（1830～1844年）には、より確実に徴収ができるよう舟木宰判内に「石炭制道方^{せきたんせいどうがた}」を設置し、石炭は藩の貴重な収入源となっていく。

■福原芳山と石炭会社の設立

明治に入ると、赤間関(下関市)に入港する外国船への石炭販売を見込んだ長州藩は、1868年(明治元年)、妻崎開作に石炭局を設置、石炭の生産から販売までを直営化し、長崎からイギリス人技師のモーリスを招聘して試錐(ボーリング)の指導を受けるなど、近代的な採炭法を試みる。しかし、1869年(明治2年)に明治政府が「鉱山解放令」を布告し、1872年(明治5年)には「鉱山心得」、翌1873年(明治6年)には、「日本坑法」が公布されたことで、地下の鉱物は国の所有となり、採掘者は政府に出願して鉱区権の取得が必要となった。

宇部炭田でこの政策にいち早く対応したのが、石炭局の役人であった福井忠次郎で、福井は井上馨や品川弥二郎らと、民間の石炭会社「小野田石炭会社」を立ち上げ、宇部も含む厚狭郡の鉱区権の大半を掌握した。この事態によって宇部の炭鉱業者も福井の石炭会社に斤先料(採掘料)を払って、採掘を行わなければならなくなり、この状況を見かねたのが、宇部の旧領主であった福原芳山^{ふくばらよしやま}である。

芳山は17歳の時に藩主の命により、京都で起こった禁門の変の責任を取らされ、自刃することになる長州藩の永代家老で、宇部の領主であった福原越後の養嗣子となり、のちにイギリスへ留学して、日本人で初めて法廷弁護士(バリスター)の資格を取得。帰国後は司法省に入り、刑法改正の草案づくりに携わるほか、大阪裁判所の判事や現在の最高裁判所に相当する大審院の判事など、法律の専門家として活躍した人物である。

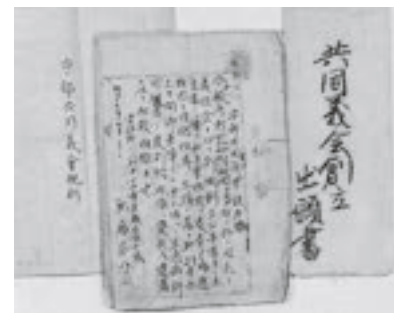
イギリスで得た法律の知識を活かして宇部地域の石炭の採掘権を買い戻した芳山は、宇部の人たち自らの手でその石炭鉱区の管理、運営を行なうための石炭会社を設立し、福原家の旧家老の俵田瀬兵衛に委ねる。

しかし、この時代の石炭の需要がいまだ少なかったこと、1877年(明治10年)の西南戦争後に大蔵卿に就任した松方正義がとった政策、いわゆる松方デフレによる不況によって、この石炭会社は必ずしも成功には至らず、芳山も1882年(明治15年)に35歳の若さでこの世を去るが、芳山の遺志は、その後、設立される宇部共同義会へと受け継がれていく。

■宇部共同義会の設立と社会事業の展開

1886年(明治19年)、福原家の旧家臣であった藤本晋一の提案により、宇部共同義会が設立される。当時、日本坑法制定後も石炭鉱区の出願にはその土地の地主を優先する地主先願権が存在していたことから、小規模炭鉱の乱立や乱獲などの弊害が現れ、芳山が設立した宇部炭坑会社(石炭会社より改称)の運営も困難となっていた。

そこで村内の地主を説得して出願優先権を委譲



宇部共同義会創立出願書(明治19年4月)

してもらふことで、宇部村内の石炭鉱区を一括的に管理し、そこから得られる利益を郷土のために還元する仕組みを作り上げたのが、この宇部共同義会である。

宇部共同義会には第一部と第二部という2つの部が存在し、第一部では、教育や社会インフラの整備、第二部では「宇部五カ村石炭坑業規則」を制定して、それに基づいて炭鉱運営に関するすべてを管理、統制して、そこから得た収益は、第一部の資金に充当した。また、日本坑法でも明確にされていなかった鉱害保障についても規定され、企業、住民、有識者の三者の協議で解決するこのシステムは、後に公害克服のための取り組みである「宇部方式」の原点ともいえる。

その後、1890年（明治23年）に鉱業条例が公布され、地主の出願優先権が消滅したことで、石炭事業を展開した第二部は1916年（大正5年）にすべての事務を終了したが、社会事業を展開した第一部は、村立中学校（現・宇部高等学校）の建設や、県立工業学校（現・宇部工業高等学校）の誘致、警察署や郵便局の整備、図書館の建設、ときわ公園の整備など、通常、行政が担うであろうさまざまな社会事業を展開、財団法人化を経て、1950年（昭和25年）に解散するまで活動は続き、宇部の近代都市形成の基礎となった。

■海底への進出

1871～1872年（明治4～5年）にかけ、宇部炭田の主要な炭層となる大派層と五段層が相次いで発見され、それらの炭層が周防灘の海底にむけて伸びていることから、以降、海岸部、さらに海底へと注目が集まりはじめる。

宇部で海底炭層の採炭に本格的に乗り出したのは1891年（明治24年）、河村喜平らによって創業した^{かた}瀧炭鉱であった。瀧炭鉱は蒸気捲揚機を採用し、海底採炭の企業化に成功する。その後、大阪の資本を導入した山陽採炭株式会社や美寿満炭^{みすま}鉱との三炭組による経営へと移り変わり、海水侵入事故などに悩まされる



海底炭鉱の先鞭をつけた瀧炭鉱（明治24年頃）

が、1909年（明治44年）に再び河村喜平が譲り受けて、築島へピーア式^{かいさく}堅坑を開鑿して稼業した。

さらに1897年（明治30年）には、渡邊^{すけさく}祐策が沖ノ山炭鉱を、1907年（明治40年）には瀧炭鉱の創立にも参画した高良宗七が西沖ノ山炭鉱を、翌年、藤本閑作が東見初炭鉱を創業するなど、以後、これらの炭鉱によって宇部の海底炭鉱の開発が進められていくことになる。

■宇部村から宇部市へ

1889年（明治22年）4月、厚狭郡内の川上村・上宇部村・中宇部村・沖宇部村・小串村が合併して誕生した宇部村は^(註6)、明治中期以降からの炭鉱の成長とともに人口が

増加し、炭鉱関連の諸産業も勃興した。さらに大正時代になると新川を中心に市街地が出現し、商店や銀行が建ち並ぶなど徐々に都市化していく。宇部村が誕生した当時、6,560人であった人口も、1912年（明治45年）には15,750人となり、1920年（大正9年）に至って40,936人と急増する^(註7)。こうしたなか、都市機能をさらに充実させるため市制施行が叫ばれるようになり、1921年（大正10年）11月1日、村から一躍、市となった。



村から一躍市制施行（大正10年）

■港湾の整備と工業都市の形成

かつての宇部の海岸線は、厚東川が運ぶ砂が堆積して砂丘を形成しており、また、防砂林として松が植えられ風光明媚な地であった。一方、海は遠浅であるため、大型船の寄港には不向きな土地でもあり、港を構築するにはおよそ1kmの堤防が必要といわれていた。

明治中期以降、海底炭鉱の開発が進められていくと、石炭と共に採掘される多量のボタ^(註8)の処理が問題となった。そこで宇部ではそのボタで海岸を埋め立て、堤防を兼ねる広大な土地を造成した。沖ノ山炭鉱が真締川河口西側の沖合に人工島「百間角」を築造し始めたのもこのころである^(註9)。やがてこの埋立地に工場が建設され、港も整備されていくことになる。

さらに大正に入ると阪神地方などへの販路拡大も相まって、宇部港建設の機運が高まり、1929年（昭和4年）4月、宇部港建設に着工し、1933年（昭和8年）7月31日に完工、本格的な港として2,000トン級の船の接岸が可能となった。



昭和8年7月31日に完工した沖ノ山南部防波堤

また、宇部市発展の父とも称される沖ノ山炭鉱の創業者・渡邊祐策は、炭鉱の近代化を進めるとともに石炭の将来を見据えた「有限の石炭から、無限の工業へ」の思想のもと、炭鉱で使う機械の製造修理をする鉄工所や、近隣でとれる石灰石と宇部で産出される石炭とボタを利用したセメント事業のほか、当時は外国産で高価だった化学肥料である硫酸を、低品位の大派炭から製造する窒素工業を設立するなど、現在の工業都市としての礎を築いた。

■宇部炭田の発明品

宇部では、砂混じりで湧水が多く、作物がとれない土地を「無毛上^{むげじょう}」と呼ぶ。1840年（天保11年）、宇部亀浦の農民であった九重郎（後に向田姓）の娘婿・茂七が琴芝の西沢で石炭を採掘し始めるものの湧水に悩まされた。それを知った九重郎が、排水を目的に兄の七右衛門と共に考案したものが南蛮車^{なんぼ}^{むかえだ}^(註10)である。この発明により、それま

で数メートルまでしか掘ることができなかった堅坑が、30メートル以上の深さまで掘れるようになり、その後、石炭の搬出にも使われるようになった。昭和30年代まで小規模炭鉱で使用されるなど、長きにわたって宇部炭田の開発に多大な貢献をした発明であった。



南蛮車を発明した向田兄弟を顕彰するために
建立された石碑（明治42年）

また、南蛮車を動かす際に歌われた労働唄をもとに、宇部礼賛を含めた歌詞を募集、それに

「七つの子」や「シャボン玉」で知られる童謡詩人・野口雨情が補作するかたちで1929年（昭和4年）につくられたものが「南蛮音頭」で、現在も広く市民に愛されている。

蒸^{むしわく}杵は1886年（明治19年）、厚狭郡藤山村（現・宇部市藤山）の船大工・和田喜介によって発明された工法である。明治以降、採掘場所が内陸部から海岸部へ近づくにつれ、さらに湧水の問題に苦勞することになった。この工法には船をつくる技術が使われ、堅坑に厚い松板で六角または八角に箱を作り、ヒノキの皮を蒸して作った巻き肌を詰め、舟釘などで固定して防水するものであった。この発明は宇部の炭鉱が海底へと進出するうえで画期的な技術革新であり、1890年（明治23年）には斜坑にも応用された。

また、海底炭^{ごぼうき}鉱の坑内において、海水浸入の兆候があった際に、簡易の防水ダムとして活躍したのが牛蒡木固である。この工法は坑道に坑木やシダを詰め込み、水を通しながらも泥土の流出を防ぐことで、その泥土が出水箇所を塞ぎ、水の浸入を止めるというものであった。牛蒡木固がいつ発明されたのか定かではないが、1912年（明治45年）から1946年（昭和21年）の間で、海水浸入の兆候があり早期に閉塞した水災事故66件のうち、牛蒡木固または牛蒡木固を併用したものは42件あったと記録に残されている（註11）。

改良ツルハシも宇部で考案された新案特許であった。ツルハシは古くから採炭の道具として使われていたものであるが、使用し続けていくと先が摩耗して使えなくなるため、常に5〜6挺を担いで昇降していた。しかし、昭和の初め頃、穂先が着脱可能な改良ツルハシが登場すると、坑内で使用されるツルハシの主流となっていった。1933年（昭和8年）、特許問題で九州の炭鉱から訴えられた際には、逆に宇部側が勝訴したことが当時の新聞記事にも残されている（註12）。

■降下煤塵問題と「宇部方式」

1940年（昭和15年）、宇部炭田最大の出炭量を記録する約423万トンを生産した。太平洋戦争後には、一時、出炭量が激減するも1950年（昭和25年）に起きた朝鮮戦争をきっかけとする特需景気により、再び出炭量も増加していく。しかし、石炭産業の隆盛とともに問題になったのが、煤塵^{ばいじん}による大気汚染であった。

煤塵は大正時代末からすでに問題となっており、集塵装置を設けるなど対策を行なっ

ていたが、戦災により壊滅した。1949年（昭和24年）10月、宇部市議会は「降灰対策委員会」を設置し、毎月調査した結果、1951年（昭和26年）には、降下煤塵量がひと月1㎥あたり55.86トンと計測され、対策が急務となった。そこで宇部市は1951年（昭和26年）6月、条例に基づき、市長を委員長として、企業代表4人、行政4人、学者2人、市議会代表4人からなる「煤塵対策委員会」を設置して対策を検討し、積極的に煤塵対策に取り組んだ^{（註13）}。この企業、行政、学識者、市民の「産・官・学・民」の話し合いによる制度は「宇部方式」と呼ばれ、全国に先がけた公害対策の取り組みとなった。

一方で、市街地の多くが元々、砂州の上に形成されたものであり、土壌も保水力の低い砂地であったことから樹木が育たないと言われていた。そうしたなかで宇部方式による公害対策と同時に進められたのが緑化事業であった。当初は市民の共感を得なかったが、次第に協力が得られるようになり、さらには1958年（昭和33年）に、商工会議所の提唱で「宇部を花で埋める会」が発足。やがて、「花いっぱい運動」など様々な市民運動へと広がっていく。

また、1960年代から始まる「まちに彫刻を飾る運動」は、1961年（昭和36年）、我が国で初めての野外彫刻展である「第1回宇部市野外彫刻展」開催のきっかけとなり、この運動は現在、世界でもっとも歴史のある野外彫刻の国際コンクール「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）」となって続いている。



常盤公園で全国初の野外彫刻展開催（昭和36年）

■宇部炭田の終焉と沖の山コールセンターの開設

戦後、日本経済を支えた石炭産業であったが、昭和30年代ごろからエネルギーの主役が石炭から石油へと転換するエネルギー革命の時代を迎えたことにより、全国の産炭地の経営は悪化の一途をたどる。1962年（昭和37年）、「石炭対策大綱」が閣議決定され、高能率炭鉱への採炭集中と非能率炭鉱の閉山という、いわゆるスクラップ・アンド・ビルド政策が進められていく。

炭鉱経営がますます厳しさを増すなか、宇部でも運搬の近代化や坑口集約など運搬合理化が進められたが、1967年（昭和42年）10月、宇部鉱業所が閉山。宇部から炭鉱の灯が消えることとなった。しかし、渡邊祐策の「有限の石炭から、無限の工業へ」の思想を実践してきた結果、石炭産業が斜陽化するなかで宇部はいち早く「炭鉱都市」から「工業都市」への転換を可能としたのである。



鉱山保安週間の標語を掲げた宇部鉱業所

また、1973年（昭和48年）に起きた第1次オイル

ショックによって、石炭が再び代替エネルギーとして脚光を浴びはじめると、1974年（昭和49年）、宇部興産株式会社宇部セメント工場は、他社に先駆けてオーストラリアから石炭の輸入を開始し、1980年（昭和55年）、沖ノ山炭鉱の跡地に「沖ノ山コールセンター」を開業した。現在の貯炭能力は280万トン、年間の取扱い能力は730万トンを誇る日本最大級の海外炭輸入中継基地であり^{（註14）}、宇部炭田最大の出炭量、約423万トンをはるかに凌ぐ。

■炭都の歴史を伝える日本初の「石炭記念館」

宇部炭田閉山から2年後、松浜炭鉱の社長であった松本佐一による働きかけと、多くの市民の寄付により1969年（昭和44年）11月1日、石炭記念館が開館する。石炭が宇部へもたらした多大な恩恵に感謝するとともに、幾多の貴重な文献機材を整備して、後世へその歩みを永く伝えるため建設が進められたもので、石炭産業に特化した施設としては全国初であった。さらに市内の主要炭鉱である東見初炭鉱で、閉山まで活躍した堅坑櫓を移設して展望台とし、翌1970年（昭和45年）には、海底の採掘現場を再現したモデル坑道も併設した。

館内外には宇部炭田や大嶺炭田（美祢市）で実際に使用された機械や道具などが収蔵展示され、2007年（平成19年）には、経済産業省の近代化産業遺産に「石炭記念館の所蔵物」が選定されている。また、展望台からは常盤湖や市街地が一望できるなど、宇部の過去と現在を知ることができる貴重な学びの場となっている。



2019年に開館50年を迎えた石炭記念館

■宇部の原点は炭^{やま}にあり

宇部炭田閉山から50年以上が経過した現在、かつての炭^{やま}跡地には当時を偲ばせるものはほとんどなく、徐々に炭^{やま}の記憶も薄れつつある。しかし、産炭地としての宇部は終わりを迎えたが、ボタなどにより造成された土地には、工業都市・宇部を支える工場が建ち並んで、国際バルク戦略港湾である宇部港には海外から輸入された石炭が集積し、市街地からも良く見える石炭専焼の火力自家発電所にある2本の高い煙突からは水蒸気が白くたなびく。また、公害問題から端を発した緑化事業や、大規模な野外彫刻の公募展「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）」といった彫刻のあるまちづくりなど、今もなお続く取り組みの原点には炭^{やま}があり、目には見えずとも、石炭産業の息吹をそこかしこに感じることができる。



石炭記念館展望台から市街地と工場群を望む

■新時代を拓く宇部市

明治期以降の石炭産業の振興により、一躍村から市制を施行し発展してきた宇部市は、その後戦災により市街地の大半が焼失したものの、まちの再建にかける市民の熱意と戦後の復興景気とともに、順調な復活を遂げた。

昭和40年代には、資源エネルギー需要の変化とともに石炭関連事業は終わり、市勢も一時期は衰退したが、その後、我が国のエネルギーの需要構造の転換にいち早く対応し、近代的な工業都市へと変ぼうを遂げ、化学工業を中心とした臨海工業都市へと生まれ変わった。



現在の宇部市臨海工場群

また、石炭を基盤に化学工業が発展していたことから、高等工業学校を誘致。それを契機に、現在も多くの高等教育機関を有している。

急激な工業化の進展に伴い生じた、ばいじん降下による大気汚染などの公害問題に対し、産官学民一体となった「宇部方式」による公害対策に取り組み、この環境改善を図った実績は、産業発展と市民福祉の調和を目指す先進的事例として広く知られるところとなり、1997年(平成9年)、これまでの環境の保護・改善への功績が高く評価され、国連環境計画 (UNEP) から「グローバル500賞」を受賞した。

この市民一丸となった自治精神の高揚とまちづくりへの情熱は、その後の都市緑化や公園整備など様々な分野に幅広い展開を見せ、特に彫刻によるまちづくりに関しては、世界で最も歴史のある野外彫刻の国際コンクール「UBE ビエンナーレ」へとつながり、市内随所へ彫刻作品が設置されるなど、「緑と花と彫刻のまち・宇部市」として知られている。



1997年「グローバル500賞」授賞式

2018年(平成30年)6月には、内閣府のSDGsの達成に向けた優れた取組を提案する「SDGs未来都市」に選定され、SDGsの達成と持続可能なまちづくりの実現を目指すとともに、その取り組みを国内外へ発信している。

また、2020年度版「住みたい田舎」ベストランキング(人口10万人以上の大きなまち)の総合部門で第1位を獲得し、都市機能と田舎の風情を併せ持つ環境、空港をはじめとした交通の利便性、医療・福祉の充実や健康づくりへの取組み等が評価された。

山口大学医学部附属病院をはじめとした数多くの医療施設の立地や、山口大学医学部・工学部、宇部フロンティア大学、宇部工業高等専門学校など、より専門的に知識を学べる教育機関も整っている。

さらに、山口大学医学部・工学部をはじめとする学術研究機関、工業都市としての発展を支えてきた企業群や技術の集積もあり、新たなイノベーションにチャレンジしていく宇部市は新時代への限りない可能性を秘めている。

【註】

- (1) 昔から慣習的に「常盤池」と呼ばれ、湖の名称が使われ始めたのは少なくとも昭和30年代以降と考えられることから、築造当時から昭和中期くらいまでの事柄については常盤池と表記した。
- (2) 1929年（昭和4年）夏に起きた干ばつの際に発見された。
- (3) 炭鉱写真集編集委員会/編『炭鉱 ー有限から無限へー』（宇部市、1998年）82-83頁
- (4) 前掲書 94頁
- (5) 瀬戸内海沿岸にあった阿波、讃岐、伊予、播磨、備前、備中、備後、安芸、周防、長門の10か国の塩田の総称。
- (6) 宇部市史編集委員会/編『宇部市史 通史篇 下巻』（宇部市、1993年）95頁
- (7) 前掲書 303頁 「表1 宇部の人口増加」
- (8) 山口や九州地方の炭鉱では、石炭以外の捨石のことを「ボタ」と言った。
- (9) 百間角の工事は1912年（明治45年）6月に着工、護岸となる石垣の築造、堅坑3本、斜坑1本の開鑿を経て、1915年（大正4年）に完成した。
- (10) 南蛮車の名称は、当時、ロクロ（滑車）のこと南蛮（「なんばん」あるいは「なんぼ」）と呼んでいたことに由来すると考えられる。
- (11) 炭鉱写真集編集委員会/編『炭鉱 ー有限から無限へー』（宇部市、1998年）127頁
- (12) 「宇部時報」昭和8年1月7日付
- (13) 宇部市史編集委員会/編『宇部市史 通史篇 下巻』（宇部市、1993年）780頁、宇部市公式ウェブサイト「宇部方式のあゆみ」（<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/machizukuri/kankyuhosen/kokusaikankyou/ubehoushiki/ayumi.html>）
[2020年8月29日アクセス]
- (14) 宇部興産株式会社「沖の山コールセンター パンフレット」（2015年）

【参考文献】

- 朝日新聞宇部支局/編『宇部石炭史話 ーすみをいかしたひとたちー』（朝日文化センター、1981年）
- 上田芳江『歴史の宇部 ー戦前・戦後五十年ー』（宇部市制五十年記念誌編纂委員会、1972年）
- 宇部興産株式会社「沖の山コールセンター パンフレット」（2015年）
- 宇部市史編集委員会/編『宇部市史 通史篇 上巻』（宇部市、1992年）
- 宇部市史編集委員会/編『宇部市史 通史篇 下巻』（宇部市、1993年）
- 宇部市石炭記念館/編『宇部炭田の歴史 語り部による ～在りし日の風景～ 記録集』（宇部市石炭記念館、2012年）

宇部市石炭記念館/編『宇部炭田の歴史 語り部による ～在りし日の風景～ 記録集 2』
(宇部市石炭記念館、2013年)

宇部短期大学附属水質研究所/編『常盤湖の自然』(宇部短期大学、1967年)

田川市石炭・歴史博物館/編『ユネスコ世界記憶遺産「山本作兵衛コレクション」全国
産炭地キャラバン展記録集』(田川市石炭・歴史博物館、2014年)

炭鉱写真集編集委員会/編『炭鉱 -戦後50年のあゆみ-』(宇部市、1995年)

炭鉱写真集編集委員会/編『炭鉱 -有限から無限へ-』(宇部市、1998年)

炭鉱を記録する会/編『炭鉱の言霊 -山口炭田炭鉱用語集-』(炭鉱を記録する会、2002
年)

炭鉱を記録する会/編『黒ダイヤと歩んで -創立10周年記念文集-』(炭鉱を記録する
会、2009年)

ときわ公園物語編集委員『ときわ公園物語』(宇部観光コンベンション協会、1998年)

百年史編集委員会/編『宇部興産創業百年史』(宇部興産株式会社、1998年)

堀雅昭『炭山の王国 渡邊祐策とその時代』(宇部日報社、2007年)

山口県立山口博物館/編『防長産業の歩み』(山口県教育委員会、1981年)

渡辺翁記念文化協会/編『復刻 宇部先輩列伝』(宇部地方史研究会、1991年)

宇部市公式ウェブサイト「宇部方式のあゆみ」(<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/machizukuri/kankyohozen/kokusaikankyou/ubehoushiki/ayumi.html>) [2020年8月
29日アクセス]

【歴代宇部市長】



初代
國吉 亮之輔



2代
林 仙輔



3代・6代
紀藤 閑之介



4・5代
國吉 信義



7・8代
伊藤 勘助



9・10代
西田 文次



11・12代
三隅 順輔



13・14・15代
星出 壽雄



16代
西田 竹一



17代
新田 圭二



18・19・20代
二木 秀夫



21・22代
中村 勝人



23・24・25・26代
藤田 忠夫



27・28・29代
久保田 后子



30代
篠崎 圭二



(19)

上空から見た宇部市(有空間撮ジャパン:2020年11月1日撮影)





宇部市提供：2019年9月撮影。(上図)宇部興産大橋、宇部市、山口宇部空港を望む。(下左図)宇部市 西部厚南地区。



(22)

(下右図) 宇部市中心街。